

老舎研究会会報 第4号

胡絮青女士 題字

老舎のもうひとつの著作 —『言語声片』の話—

日下 恒夫

老舎といえば、だれしも北京とくるのが当たり前。もっとも、中には山東や重慶を思い起こす人がいたとしても不思議はない。イギリスやアメリカを連想する人は、かなりの「老舎通」。しかし、老舎と聞いて上海と答える人は、よほどの変り者。そして、今の私はそんな人間のひとりである。ここは、老舎の著作をめぐる、私と上海のいわば「奇縁」とでもいべき一段から始める。

大学から一年間のサバティカルの休暇が与えられたのを機に、たまたま友好大学となった復旦大学に赴き、一年を上海で過ごすことになった。上海生活が始まって約一か月半、そろそろ日本が恋しくなりはじめた。そんなある日の夜遅く、招待所に電話がかかってきた。思いもかけない日本人の声、かつての教え子からであった。三年前に卒業して、今はある商社に勤めており、出張で上海にやってきたという。久し振りのことであり、近況も聞きたいし、日本語も話したい、しかも家人からの頼まれものを持参しているとのこと。それならゆっくり夕食でもご馳走しようと思ったが、周知のとおり、商業の最前線で働く日本の商社員にとっては、滞在日数が二日や三日という出張では殆ど個人の自由時間などというものが無いという。なにしろ、彼らには「上班」という言葉はあっても、「下班」という言葉はなく、明け方から夜中の一時、二時まで働くのは当たり前、徹夜もめずらしくないらしい。そんな事情を知ると、無理にこちらのために時間を作らせるわけにもいかない。自

由になる時間は、と尋ねると、公司や工場を回って商談したり雑用で町を回るときにタクシーで移動するので車中なら暇(?)があるとのこと。学生時代の姿しか思い浮ばないので、そんな話を聞いても、ただもう感心するほかない。ともかく、こちらは時間だけはあるので、その教え子の取り引き先の客に断わって、タクシーに同乗させてもらうことにした。彼らが用事をすましているあいだ、こちらは適当に時間つぶしをするのである。

錦江クラブ横のビルに入ってゆくのを見送ってから、その向いにある錦江飯店の中をぶらつくことにしたのも何か目的があったのことはない。そこには、食料品店や郵便局、工芸品店やブティックなどと並んで本屋もある。外文書店の分店である。四月に上海に着いて以来、その書店を眺めているのははじめてのこと。むろん、福州路や南京路などにある書店にはときおり立ち寄ることもあったが、その分店は、復旦大学が遠いのと、どうせホテルに泊っている外国人のための本屋であるから観光案内程度のもので主たる本であろうと思っていたので、入ってみる気も起らなかったのである。

中に入ってみると、そういった類の本ばかりでもない。しかも、南京路あたりの書店と違い、人が少ないだけに、かえって時間つぶしにはもってこいの場所。店内を一巡していると、すみの方の台の上に、十冊ばかりの古書が柱の陰で身を隠すように積まれているのが目に入った。ぶ厚いフランス語の辞書、英文の経済学の本、日本語の歴史書……。横積みになっている本の中ほどに、なつかしい文字を見つけた。それは『言語声片』の四字である。いうまでもなく、この本は、ロンドン大学「東方学院」の理事デニソン・ロスが総編集者となって刊行されたり

ンガフォン・オリエンタルコースの中の一冊、中国語の学習用テキストである。この中国語教科書の編集に直接携わった人は三名であり、二人のイギリス人と一人の中国人、いずれも当時の「東方学院」の教師である。そのうち中国人の名前は、C. C. SHUとあり、ローマ字で記してある。リングフォンの外国語教材の売り物はむろんレコードであるから、当然それを吹き込んだ人の名前も編者の名前の下に印刷してある。それもC. C. SHU。

ところで、この中国人の名前は1920年代から今にいたるまで、中国人にとっては馴みのない名前であるが、イギリスや西欧の人々にとっては、殊に中国語や中国文学の愛好者にとっては、記憶にある名前のはずである。リングフォンで中国語を学んだ人々にとっては、テキストの最初に二か所も名前が印刷されているのであるから、もちろん馴染み深い名前であったろうが、それだけではない。英訳で『金瓶梅』を読んだ人にも記憶に残っているはずである。1939年にロンドンで出版された英訳『金瓶梅』（第一奇書本による全訳）の訳者C. エジャートンは、前書きの中で、「わが友人C. C. SHU」の援助があったからこそ難解なこの小説の翻訳が可能であったと述べているだけでなく、この訳書をC. C. SHUに献げているのである。一人の中国人に対する献辞を本の扉に印刷して出版したということから、この中国人と訳者との間の深い関係を見てとることができる。また、『金瓶梅』という秀れた現実主義の小説を西欧の読者にとって身近かなものとしたのも、C. C. SHUという中国人の功績とあってよい。

老舎の愛読者ならずで誰かが知っていることであるが、このC. C. SHUという中国人教師こそ若き日の老舎である。老舎は、東方学院で中国語（北京口語とのちに古典も）を五年間に亘って教え、また教え子であり古典学者のC. エジャートン夫婦とともに三年間一つ屋根の下に住み、彼の訳業を助けたのである。こんな分りきったことを述べたのは、たとえば小野忍が『金瓶梅』の翻訳について語った文章の中で、「エジャートンの英訳は、イギリスの大学

（たぶんロンドン大学）で東洋研究学科の講師をしていた中国人の助力のもとに成り、起稿以来十五年を経て、本になった。」（『道標—中国文学と私』P. 245）と述べているようなことが気になったからである。これでは老舎は浮べれない。ところで、老舎はC. C. SHUという名前を在英時代にのみサインをする時に用いたのであるが、SHUはむろん「舒」の音を示し、はじめのCというローマ字はCOLINの頭文字、次のCは「慶春」という名をウェード式ローマ字で表した時の頭文字。もちろん、慶も春もウェード式ではCで始まるのであるから、そのことも考慮に入れたかも知れないが、COLINという名のことを考えれば、はじめのCはその頭文字と考えるべきであろう。そして、さらに推測すれば、このCOLIN（原義は人民の勝利ということらしい）という名は渡英前に北京で洗礼を受けた時のクリスチャンネームではないかと思われる。

さて、『言語声片』と題する本を私がはじめて知り、日本の古書店で買ったのは、もう十何年も昔のこと。むろん、その時に買ったのは初版本などではなく、なんの変哲もない普及本で、今でもときおり見かける第三版であった。ところが、外文書店の台のうえに横積みされているその本を手にした時には、ほとんど我が目を疑った。それは紛れもなく初版本。本の作りも立派で、いかにも英国風の重厚な皮製の表紙と背の金文字も年を経て風格がある。ところが、残念なことがひとつ、この本も第三版と同様どこにも発行年が記されていないのである。かつて第三版を手にしたとき、リングフォン協会に出版年のことを問い合わせたことがある。そのときのロンドンからの回答は、協会には当時の資料がすでに失われており明確なことは分らないが、おそらく1930年ではないだろうか、とのことであった。そのとき以来ずっと刊年が気に懸っていたのである。1930年といえば、老舎がイギリスを離れた年であるから、あるいはもう少し早い時期の出版ではないかとも思っていた。

かりに1928年の刊行であるとすれば、老舎

の著作のうち単行本として最初の本が『老張の哲学』で一月、『趙子日』が四月であるから、この本はもっとも早い時期の単行本ということになる。また、1929年だとすれば、あるいは1930年であるとしても、第三冊目である。もっとも、そんなことは大した問題ではない。この本は、老舎の多数の本のなかで、小説以外の著作としては最初のものなのだから、そのことだけでも重要な事実であるといつてよい。これまで多くの文章のなかで、老舎がリングフォンの教科書のためにレコードの吹き込みをしたことに触れたものはあっても、リングフォンの中国語教科書そのものを編んだ事実に触れたものはなかったからである。二年前に『老舎年譜』（学研版老舎小説全集第十巻附録）を編んだとき、そのことに触れたが、あるいはそれが最初かもしれない。

われわれは、老舎がこの本の編者として名を連ねていることから、老舎が単にレコードの録音に携わっただけでないことを知る。そしてさらに『言語声片』の英語版（この本は二分冊であり、Vol. 1が英語による訳を中心とした本、Vol. 2が漢字本である）の導論のところを読めば、老舎とこの本とのもう少し詳しい関わりを知ることができる。そもそもこの本は全30課から成っている。1課から27課まではそれぞれの課が「上」と「下」に分かれ、「上」には基本的な例文、「下」にはそれらの応用篇とでもいふべき少し複雑な対話が配されており、どちらにも生詞が置かれている。28、29、30課は、かなり長くて複雑な実践的対話文から成っている。上述の導論部分によると、16課から27課までの「下」の対話文、および28、29、30各課の全文が老舎の手に成るものである。要するに断片的な例文でない役に立つ部分は総て老舎の執筆といつてよい。むろん、1課から15課までの、いわゆる文法的説明のための例文や16課以降の「上」の部分の例文と生詞、あるいは発音に関する部分についても、老舎がネイティブスピーカーとして目を通したであろうことは疑いない。また、共編者である二人の英国人、J. PERCY BRUCE と E. DORA EDWARDS とは、共に

中国の古典文学や思想を専門にする学者であることも考えれば、『言語声片』を編集するにあたって、老舎の果たした役割は、単にインフォーマントとして参加したというより、むしろ中心となって編集したのでないかとも思われる。まして、単に録音しただけでないことは言うまでもない。

ところで、この本を目にしたとき、ようやく三年前のことを思い出した。その年の春、中国を旅行し、北京からの帰途上海に一泊した日のことである。団の一人で私の学生が、やはり同じ書店で一冊の古書を買ったことがある。林語堂の編訳で英語による中国短篇小説選集がそれ。題名を『A NUN OF TAI SHAN AND OTHER TRANSLATIONS』といい、1936年10月上海の商務印書館の発行、全272頁、中国語では『英訳老残遊記第二集及其他選訳』とある。なに気なく林語堂の名にひかれて手にしたこの本に、まるで付け足しのように何篇かの現代文学の短篇小説も入っていたのであるが、そのうちの一篇が『TALKING PICTURE』であった。むろん老舎の短篇『有声電影』の英訳。この作品は1933年に発表されたものであるが、英語になったのが三年後。いま知りうる限りにおいて、この作品は、老舎の作品のなかで最も早くに英語に翻訳されたものではないだろうか。その日上海に一泊した団体の名は「老舎愛好者訪華団」、これも一つの奇縁。私が老舎と聞いて上海を思い起こすもう一つの理由でもある。

話を元に戻す。このリングフォンのレコードとテキストは、単に老舎研究家にとって重要な資料であるばかりでなく、われわれ老舎愛好者にとっても大きな楽しみを与えてくれる。いま私はレコードそのものもっていないので、レコードから再録音したテープから流れる音声でがまんするしかないのだが、それを聴けば、55年も昔の青年時代の老舎の声に接することができるのだ。おそらく老舎としては生まれてはじめてマイクロフォンに向かって吹き込んだにちがいない。少し緊張した若々しい声である。もとより、この音声は半世紀以上も前の北京の知識

人が朗読するときの一つの典型的なものであろう。言語史の研究者にとっても生きた研究資料といってよい。さらに、この教科書のVol. 2は漢字本であるが、そこに印刷されている漢字の部分はすべて老舎自身が毛筆で書いた文字を影印したものであり、レコードがわれわれの耳を楽しませてくれるように、漢字もまたわれわれの目を楽しませてくれる。それによって、あの少し右肩のさがった、しかし一点一画もおろそかにせず丁寧に書かれた若き日の老舎の字体に触れることができる。晩年の字体に比べると、もちろん幼なさは残っているが、そのためにかえって親しみを感じさせる老舎の文字を眺められるというのは、私にとって眼福を得たというもの。

上に漢字部分はすべて老舎の筆跡であるといったが、厳密にはそうではない。実をいえば、全207頁からなるこの本には、190頁から198頁までに附録として漢字索引があり、それは各課に挙げられた生字と生詞のうち生字のための総索引であるが、その索引の漢字だけは老舎の書いたものではないのである。本文中の漢字および附録のうち偏旁一覽表に見られる楷書と隸書は、どちらも老舎の筆跡と一目で分かる精確な筆使いである。しかし、この索引部分の書体は丁寧に欠ける粗筆とあってよく、別人の筆になることは明かである。では、なぜここだけが老舎の筆跡でないのか。上述のように、この索引部分は新出漢字の索引であるが、それぞれの漢字には番号が附されている。まず本文中の生字に番号が附けられはじめて索引を作成することができるのであるが、索引作りの常として本文のゲラ刷りができてから作ったものであろう。普通ならその時点で本文中の漢字を書いた老舎の慎重な筆に依頼するはずである。しかし、それを頼もうにも頼めない状況であったのではないだろうか。すなわち、そのときには本人がイギリスを離れたあとで、ロンドンにはすでにおらず、そこで已むを得ず老舎とは別の、あまり上手とはいいかねる人間に依頼したのではないか。もしそうであるとすれば、『言語声片』の漢字索引のみが老舎の字体でないという理由

がつくというものである。そう考えれば、あるいはリンガフォン協会の回答のとおり、この本は1980年の出版であるのかもしれない。

いったん自分のものになった本は、根輪際他人には与えたくない、それどころか見せるのもいや、というのが世の愛書家の癖。それなら私は愛書家として落第生ということになってしまう。できたばかりの現代文学資料館を北京西郊に訪ねたとき、おりから開催中の老舎展覧会を見ることができた。そこに陳列されていた多くの本や関係資料のほとんどは老舎の家族の提供になるものであるが、聞けば、あの豊富胡同（どうでもいいことだが、私は昔の豊盛胡同という名称が好きだ）の、庭に二本の柿の木がある老舎の故居が、近く老舎記念館になるとのこと。そこには老舎の著作が常時展覧に供せられることであろう。老舎の在英時代の「著作」として、『言語声片』ももちろん並べられるに違いない。それなら、そこに展示される著作は、いうまでもなく複製品や再版本でなく、重厚な皮表紙の初版本こそが相応しい。しかも、記念館になる予定の家にはそれがない。そこで、本の身になって考えてみた。考えるまでもなく、わが家の雑然とした書架に並んでほこりを被っているよりも、北京にいるほうが晴れがましい気分を味わえるというものだ。かくして、この本も、私の手元にあったのは一か月あまり、六月末の暑い日、上海から北京へ嫁して行ったのである。

<追記>この文章は、雑誌『書林』（上海文芸出版社）編集部依頼によって書いたエッセイ「老舎的另一本著作——談靈格風韻的課本《言語声片》」を、二、三の箇所手を入れはしたが、ほぼそのまま日本語に書き改めたものである。

老舎文学の原点 ——「小人物自述」——

倉橋 幸彦

老舎の旧友で著名な言語学者である羅常培は

民国三十三年（一九四四年）四月十九日付の昆明『掃蕩副刊』誌上に、「我与老舍」と題す文章を発表。この一文は、老舍の創作二十周年を記念して書かれたものであるが、その終わり近くに、老舍が三十年代なかごろから、“拳匪の乱後の北京を背景とする自伝体歴史小説”の構想を練っていたという秘話を公開。さらに続けて、当時この老舍の執筆計画を知った羅常培は、老舍と同じく清朝末期の北京に生まれ育った一人の生粋の北京っ子として、あるいは出身を同じくする一旗人仲間として、特別な思いを込めて老舍の執筆を励まし、その執筆を助けるべく、北京の古老たちからの聞き書きや義和団事件に関する資料の収集に奔走したと言う。そして最後に、老舍がこの執筆計画を、抗戦期の七年に及ぶ流亡生活のなかで頓挫せざるを得なかったことを悔やみ、近い将来この“未完の‘傑作’”が脱稿されることを切望して、この一文を終えている。

上で見た羅常培の証言は、従来、三十年代の老舍小説執筆計画の一端を知りうる唯一の資料として、大変貴重なものであった。また、一九七九年に老舍の未完の自伝体小説が発表され、その執筆経緯を語る場合には、やはり上の羅常培の言を採用。「正紅旗下」は、構想を温めること実に約三十年、老舍がようやくにして筆を執った作品である、と理解されてきた。ただ、このたび陳福康氏（元、上海文芸出版社、現在は北京師範大学博士学位研究生）によって発見された老舍の佚文により、上述の羅常培の証言に、些か修正を加える必要が生じたのである。

新しく発見された佚文とは、字数約一万五千字、全四章、民国二十六年（一九三七年）八月一日出版の『方舟月刊』第三十九期・文芸欄（P67～84）に連載小説の第一回掲載分として発表されたものであり、その名を「小人物自述」という。題名からもわかるように、“小人物”つまり老舍の生い立ちをもとにした自伝体小説の序幕部分である。詳しい内容については後に述べることにして、先ずこの「小人物自述」の執筆時期について触れておこう。

雑誌掲載年月日から類推すると、執筆時期は

一九三七年の上半期であると予想できる。また、民国二十六年二月一日発行の『方舟月刊』第三十三期より、当刊の“特約撰述人”の一人として、老舍が名を列ねていることからすると、一九三七年の一月には特約連載小説の契約を取り交わしていた、ということができる。

さて、一九三七年上半期といえば、前年の下半期に引き続き、老舍の生涯を通じ、老舍が著作のみに専念することのできた唯一の特筆すべき時期である。この時期の老舍の具体的な著作活動については、他ですでに多く言及されていることなので、ここでは詳しく触れない。ただ、老舍自身が後に当時の著作活動を回顧する時に、必ず触れている未完の二本の長篇小説については、やや詳しく見ておく必要がある。これまで、この二本の長篇に関しては不明な点が多く、いわば一つの謎とされていたのであるが、今試みに、老舍の「這一年的筆」（漢口『大公報』一九三九年七月七日）・「成績欠佳、收入更欠佳」（『天下文章』創刊号・一九四三年三月十五日）という二篇の文章を中心に、この二本の長篇についてまとめてみると、以下ようになる。一九三七年上半期、同時進行という形で二本の特約長篇連載小説を執筆。一本は青島を舞台とし二万字余り（三万字ともいう）、一本は北平を舞台とし三・四万字（七万字ともいう）執筆。一本は掲載予定雑誌の停刊したことにより、一本は、雑誌は継続刊行されており、数度に互る原稿の催促を受けたにもかかわらず、内容が抗日戦と関わりを持たず、日中戦争が全面化した時勢を考慮したことにより筆を折る。二本ともに一年間連載の契約であり、毎月一万字、千字につき原稿料十元。脱稿の暁には二本合わせて三十万字になる予定であった。一本は、『宇宙風』に掲載された連載予告により、その題を「病夫」と名付けることが判明。一本は題名すらわからないものとされていた。と、ここまでいえばすでに明らかであるように、この題名不詳の一本が、このたび新しく発見された「小人物自述」なのである。そして、「小人物自述」の連載第一回分を第三十九期に掲載した『方舟月刊』が、この期を最後に停刊されていること

も、上述の老舎の語るところと一致する。序ながら、上で見た千字につき十元という原稿料は、『方舟月刊』『本刊徵稿啓事』にある“千字につき二元から十元”という揮毫料のきまりからすると、破格のものであったといえる。

老舎が自己の作品に対して、一方では極めて無関心を装いながら、実は自己の著作経験を述べる文章の中で、自己の作品をこっそりと告白することにより読者に自己の作品に対する愛着を暗示するというのが、老舎の常であった。この二本の未刊長篇小説に対しても、同様の方法を用いたのである。さらにいうならば、『方舟月刊』という雑誌名も、老舎の「文芸副産品—孩子們的事情」(一九三七年五月『宇宙風』第四十期)という文章のなかでちゃんと取り上げられている。いま、その関連箇所を引用しておく。

私達は、毎月かならず『文学』、『中流』、『青年界』、『宇宙風』、『論語』、『西風』、『談風』、『方舟』を読んでおり、『方舟』を定期購読している以外は、すべて贈呈されているものである。

上に引いた一文は、佚文「小人物自述」発見の唯一の手掛かりであると思われるが、佚文の発見者陳福康氏に直接お会いしてこのあたりのことをお伺いしたいものである。

ところで、この『方舟月刊』という雑誌、老舎を語る場合にはいうまでもなく、三十年代文学を扱う場合にも、従来取り上げられたことのないものではないだろうか。故に、ここではやや詳しく紹介しておく必要がある。

民國二十三年(一九四三年)六月一日創刊。毎本定価一角五分、発行部数一萬部。雑誌名は、ノアの方舟(箱船)の故事に由来するが、雑誌の性格とキリスト教は直接の関係を持たない。発行所は、天津英租界内方舟月刊社とするが、資本は天津東亜毛尼紡織股分公司。つまり、紡績会社が自社の製品宣伝を第一義とする“唯一の新型家庭月刊”である。毎号、「家庭欄」、「編み物欄」、「衛生欄」、「文芸欄」、「美術欄」、「珍聞欄」、「兒童園地」を配置し、「編み物欄」には写真をふんだんに掲載、“特

約撰述人”の多くは、家政学に一見識を持つもの。これからもわかるように、この雑誌での文芸の役割は、いわば添え物的なものである。しかも“軍事政治に関わるものは掲載しない”と“投稿規章”に断る。

以上、長々と『方舟月刊』雑誌を紹介してきたのは、一つは先に書いたように、従来取り上げられたことがないため、もう一つは、雑誌の性格を明らかにすることにより、一つの作品が日の目を見るのに五十年近くの年月を要した理由を言いたかったからである。

また、上で紹介した『方舟月刊』を老舎が定期購読していたという事実は、老舎三十年代の生活の一エピソードであるとともに、そこに老舎の読書趣味の一端を垣間見ることができよう。

さて、話しを本題に戻して、<<小人物自述>>の内容について、少し詳しく見ておく必要がある。それは、先に何の断りもなしに、老舎の自伝体小説と称した理由を明確にしておかねばならぬからである。

主要な登場人物は、この小説の語り手である主人公の“私”。同居人としては、主人公の母親、下の姉、伯母(父親の姉)の三人。そして、すでに他家に嫁いでいた上の姉に、母方のいとこ“二哥”と隣人の“関二大媽”の総勢六人。

第一章。“自述”の序幕は、主人公の姓名紹介。姓を王、名を一成という。この“一成”という名、日本語に訳せば“一分、一割”という意味であり、いかにも“小人物”に相応しい名である。もちろん本人としては、大いに不満。“十成”とまでいわなくとも、せめて“六・七成”であってもよさそうなもの、という。ただ、この名は父親が命名してくれたもの、しかもその父親が自分が生を受けること十一ヶ月にして死去。たとえ不名誉な名であろうと、これが父親との関係を保つ唯一のものである。

次に、自己の出生談をひとくさり。この世での第一声、か細い産声を上げたのが、“空気すら凍てつくよう”な十二月中旬とある日没。そして、“私”の誕生を見届けてくれたのは、わずかに年老いた産婆と下の姉の二人だけ。おま

けに、母親は出産後すぐに気を失い、下の姉はただうろたえるばかり。たまたま通り合わせた隣人の“関二大媽”は、母親の気絶を石炭ガス中毒と判断。ややしばらくして伯母が帰宅。普段は賭け事に明け暮れて頼りにならぬ伯母ではあるが、このときばかりは下の姉に上の姉を呼び戻させるという機転を発揮。このおかげで、“私”は何とか一命を取り留める。“あの時、上の姉はすでによそに嫁いでいた。そのうえ、娘すらもうけていた。私は生まれながらにして伯父になれたことを上の姉に感謝するのではない。もちろん、これは自慢するに足る事ではあるが。私が感謝しているのは、彼女が、初めて私を発見し、胸に抱いてくれたからである。もし彼女がいなければ、十中八九私は生きながらえていなかったであろう。たとえどんなに生を望み死を恐れたとしても。”

第二章。ちっばけで悲惨な人生の第一歩。そして後も、悲しくて辛い日々が続く。母親には、“私”に飲ませ与える乳もなく、豆乳汁だけではわずかに飢えを凌ぐにすぎず、この世に存在する唯一の証である元気な泣き声すら上げることができなかった、と嘆く。世に“七坐八爬”とはいうものの、“私”は七ヶ月になっても座することもできず、八ヶ月になってもはうことすらできなかった。この時すでに、人生の悲哀を知り、辛抱と“敷衍”とを会得した、ともいう。そして、父親の異郷での死を迎える。その遺骸を引き取れぬことで大いに頭を悩ます母親と伯母。そのうえ、父の死を知ってか知らぬか、昼夜泣き止まず、涙が枯れても“空泣き”を続ける“私”。ここでいとこの“二哥”登場。父親の遺骸引き取りはしばらく棚おきして、まず父の霊を慰めるために、僧による読経と法要の儀式を提案。これは、“私”にまつわる亡父の霊退治をも兼ねていた。これで、父親の死をめぐる亡霊事件も一件落着。

第三章。ここでは、“私”が生まれ辛く悲しい幼少期を過ごした“胡同”を事細かに回想。わが“胡同”には、六世帯と二つの大きなえんじゅの木が同居。中庭は、東西に長く南北に狭く、土地は大変窪んでおり、大雨が降るたびに

庭中水浸し。北の棟に三間、入り口が二つ。二間を母と下の姉とで、残り一間に伯母が住む。東の棟二間には、“関二大媽”と塗装師見習いの息子が借家住まい。東の棟の後ろには、露天の小さな便所がある、といった具合。

第四章。第三章に引き続き、ここでは家屋内部の紹介がひとしきり。

以上見てきた事から明らかなように、“私”の家族構成といい、出生あるいは父親の死といい、『小人物自述』で語られたすべてが、細部を無視すれば、老舎の境遇と一致する。また、この『小人物自述』は、後の『正紅旗下』の草稿的役割を果たすものであること言うまでもない。 一九八五年十一月七日 於 勺園樓

(待続)

老舎資料近刊(2)

1984年追加

1. 史哲平「论老舍的爱国主义，——纪念老舍同志八十五华诞」 山东大学文科论文集刊(济南)1辑 p.26~38; 中国人民大学书报资料社复印报刊资料 85年10月 p.89~100
2. 吴小美「市民社会灰色人物的灰色悲剧」 兰州大学学报1期 p.75~82
3. 王行之「老舍的语言艺术观」 光明日报 3月15日3版
4. 舒乙「小星星」 收获2期 3月25日 p.58~64
5. 徐麟「论〈骆驼祥子〉的结尾和其他」 中国现代文学研究丛刊1辑 3月 p.255~269
6. 张学军「一曲凄苦愤烈的歌——论〈月牙儿〉」 山东省现代文学研究会编『中国现代文学散论』 山东文艺出版社 4月 p.43~354
7. 吴文焕改编・毛震耀绘画『骆驼祥子』 上海人民美术出版社 4月 p.1~222
8. 徐志超「〈茶馆〉分析」 『中国当代文学作品选讲(上册)』 广西人民出版社 5月 p.498~508

9. 冯光廉等「老舍：第一节 生平与创作道路，第二节 <骆驼祥子>」『中国现代文学史教程（下册）』山东教育出版社 5月 p.1~23
10. 张中良「浅谈老舍<离婚>的喜剧特色」中国现代文学研究丛刊2辑 6月 p.299~325
11. 克莹「老舍剧作留给我们的启迪」文艺研究4期 7月21日 p.56~60
12. 王献忠「老舍笔下的北京民俗」读书8期 p.71~80
13. 曾广灿「老舍与梁实秋」文史哲5期 9月7日 p.72~74
14. 姚健「111 老舍对中国现代文学的贡献」『中国现代文学史题解』山东教育出版社 9月 p.297~299
15. 「112 老舍笔下的市民形象具有哪些突出特征」同上 p.300~301
16. 「113 祥子的悲剧性格及其典型意义」同上 p.302~304
17. 「114 <骆驼祥子>在艺术上取得哪些突出成就」同上 p.304~307
18. 「115 <四世同堂>的思想意义及艺术特色」同上 p.307~310
19. 向东「老舍被冒名、盗版图书辨析」中国现代文学研究丛刊3辑 9月 p.311~313
20. 钟敬文「赠别『日本老舍著作爱好者第三次访华团』诸君（四首）」人民日报 10月19日 8版 84年〔85〕と同文
21. 平松圭子「方向補語『起去』について——老舍の作品に見える『去』字句を中心に」大東文化大学創立60周年記念中国学論集 12月25日 p.807~819
22. 杉本達夫「文協の成立」中国文学研究 10期 12月 p.71~88
23. 斉藤匡史「抗戰以前の老舍文学の分期について」中国文学論集13号 12月 p.187~205
24. 张扬「从丑虎姐不太丑谈起——小议电影和文学欣赏效果上的差别」电影艺术 12期〔总149〕
25. 万平近「老舍与林语堂及其论语派」新文

学论丛 4期 12月 p.129~142；中国人民大学书报资料社复印报刊资料 85年10月 p.51~64

26. 耿宝石「说<月牙儿>」铁岭教育学院院刊（辽）试刊号 p.45~48；中国人民大学书报资料社复印报刊资料 85年10月 p.86~88

1985年訂正

1. 吴组缃「说<离婚>」削除
19. 「……<四世同堂>の下演」は上演

1985年追加

1. 牛运清「关于老舍中篇小说<无名高地有了名>的评价」文史哲1期 1月7日 p.59~65
2. 「中国<短篇小说选>和老舍名著在民主德国出版」北京日报 1月29日3版
3. 陈立群「地坛茶馆的第一位主顾」北京晚报 2月12日
4. 日下恒夫「老舍『猫城記』と聖書」中国文学会紀要 9号 3月25日 p.143~153
5. 武永尚子「<茶馆>における語氣助詞」語学教育研究論叢 2号 3月30日 p.131~145
6. 「老舍为『洋八股』画像」北京日报 5月4日5版 摘自4月14日<解放军报>
7. 李文玲「小未乐的插曲 <四世同堂>拍摄散记」北京晚报 5月21日
8. 李文玲「钱诗人的遭遇 <四世同堂>拍摄散记」北京晚报 5月27日
9. 张玫珊「论老舍小说中的社会理想」中国现代文学研究丛刊2辑 5月 p.107~127
10. 朝戈金「老舍关于宗教的佚文」同上 p.208~211
11. 曲波「清水流香」同上 p.258~267
12. 陶长坤「老舍幽默探源」社会科学辑刊（沈阳）2辑 p.153~158；中国人民大学书报资料社复印报刊资料 10月 p.69~74

1985年(2)

27. 骆玉笙「当了曲协主席怎么办」 北京晚报
6月4日3版
28. 孙扶民「她的演出“真够味儿”——记北京人艺演员李婉芬」 光明日报 6月5日
29. 李文玲「“军人出身”的祁瑞宣——〈四世同堂〉拍摄散记」 北京晚报 6月8日
30. 同上「小羊圈里的日本人——〈四世同堂〉拍摄散记」 北京晚报 6月9日4版
31. 同上「充满创作激情的人——〈四世同堂〉拍摄散记」 北京晚报 6月17日4版
32. 房建魁「电视剧〈月牙儿〉在录制中」 北京日报 6月23日2版
33. 同上「电视剧〈月牙儿〉在拍摄中」 北京晚报 6月25日4版
34. 吴雅山「南方的“北京老爷子”——访〈四世同堂〉老爷子扮演者邵华」 北京晚报 6月25日1版
35. 郝学胜「〈四世同堂〉片头够味儿」 北京晚报 6月28日3版
36. 顾子欣「日本的『老舍迷』——访柴垣芳太郎先生」 人民日报 6月30日7版
37. 「老舍の死」 亜太展望 6月号 日本語版 2卷6号 p.35~39
38. 肖涤非「聊城铁公鸡——兼怀老舍」 中国烹饪 3期 p.6~7
39. 王晓芳「小羊圈胡同」 北京晚报 7月1日3版
40. 胡絮青·舒乙「老舍和周恩来」 人民日报(海外版) 7月2日8版
41. 涇洞「北影西四一条街」 人民日报(海外版) 7月2日7版
42. 李福良「以羊命名的胡同」 北京晚报 7月3日3版
43. 「献给反法西斯战争胜利的纪念品——老舍力作〈四世同堂〉搬上屏幕」 人民日报(海外版) 7月6日7版
44. 胡絮青·舒乙「〈四世同堂〉今昔谈」 同上
45. 张永经·胡伟「一幅热爱和平的生活画卷」 同上
46. 孙敬修·金惠蓉「『小羊圈』在哪里？」 同上
47. 张大农「李维康拍电视」 同上
48. 杨澄「看戏致旧友」 同上
49. 李文玲「〈四世同堂〉拍摄拾零」 同上
50. 王捷南「『一支反法西斯的纪念曲』——老舍夫人胡絮青谈电视剧〈四世同堂〉」 文汇报 7月7日
51. 于志恭「多情最是卢沟月」 北京晚报 7月7日3版
52. 林汝为词「重整河山待后生」 同上
53. 林竹君「老舍夫人胡絮青谈〈四世同堂〉」 光明日报 7月9日
54. 陈为群「〈四世同堂〉读书报告会」 北京日报 7月11日2版
55. 刘建伟「小羊圈的白巡长——记黄少泉在〈四世同堂〉中的表演」 北京晚报 7月11日4版
56. 舒乙「舒庆春等毕业生纪念母校校长的石碑发现记」 老舍研究会会报第3号 7月15日 p.1~2
57. 曾广灿「致日本老舍研究会第二次年会」 同上 p.3
58. 「老舍资料近刊(1984年 1985年)」 同上 p.4~7
59. 范龙光「日本特使被刺有事」 北京晚报 7月17日3版
60. 舒乙「父亲最后的两天」 收获 4期 7月25日 p.220~227
61. 徐棻「她演活了“大赤包”——访电视剧〈四世同堂〉演员李婉芬」 文汇报 7月26日4版
62. 侯利人「与老舍家人看〈四世同堂〉」 北京晚报 7月26日4版
63. 「老舍名著〈月牙儿〉在泰国翻译出版」 人民日报(海外版) 7月28日6版
64. 「老舍的自传」 人民日报(海外版) 8月1日8版
65. 朱述新「电视连续剧〈四世同堂〉风靡首都观众称赞它是“激扬爱国主义热情的史诗”」 光明日报 8月2日
66. 唐斯复「电视剧〈四世同堂〉诞生记」 文

- 汇报 8月2日
67. 梅晓「这句台词不好」 北京晚报 8月2日3版
 68. 朱述新「一部激扬爱国主义热情的史诗 首都观众盛赞电视剧《四世同堂》」 北京日报 8月3日1版
 69. 「胡絮青谈电视剧《四世同堂》观感 摘自《团结报》」 文汇报 8月3日
 70. 李下「曹禺谈电视剧《四世同堂》」 文艺报 8月3日1版
 71. 山海客「小彩舞歌唱的魅力」 北京晚报 8月3日5版
 72. 沈卫星「首都部分文艺界人士在本报文艺部举行的座谈会上赞誉 电视剧《四世同堂》是激扬爱国主义的力作」 光明日报 8月4日
 73. 「一曲富有民族特色和时代精神的正气歌——本报文艺部八月二日召开电视剧《四世同堂》座谈会发言选登」 光明日报 8月7日2版
 74. 夏淳「为电视连续剧开了一条很好的路」 同上
 75. 鲍昌「历史题材创作的新收获」 同上
 76. 蓝翎「民族的东西总是有艺术生命力的」 同上
 77. 陈德元「山本荣治被刺案」 北京晚报 8月7日3版
 78. 小助「《四世同堂》演员今晚同观众见面」 北京晚报 8月7日4版
 79. 刘建伟「“老二”给人留下的爱与憎——记赵宝刚在《四世同堂》中饰演的祁瑞丰」 北京晚报 8月8日4版
 80. 柴垣芳太郎「中国のテレビドラマ『四世同堂』を見る」 中日新聞 8月8日夕刊
 81. 陈昊苏「电视剧艺术的新高度——祝贺电视剧《四世同堂》播映成功」 北京日报 8月10日3版
 82. 张今「《四世同堂》播后随想」 同上
 83. 「曹禺说,《四世同堂》应是电视剧保留节目 摘自八月三日《文艺报》」 同上
 84. 薛建农「一部爱国主义和反法西斯主义的生动教材 《四世同堂》深深打动本市观众」 文汇报 8月10日
 85. 本报评论员「《四世同堂》给我们的启示」 同上
 86. 王纪人「为民族化开出一条新路——电视连续剧《四世同堂》观后」 文汇报 8月11日
 87. 群「《四世同堂》明起向全国播出」 北京晚报 8月11日4版
 88. 刘建伟「真实难忘的历史——一对了解老舍的夫妇谈电视剧《四世同堂》」 北京晚报 8月12日1版
 89. 夏淳「《四世同堂》是一部成功之作」 北京日报 8月13日5版
 90. 金国相「这句台词洋溢愤懑之情」 北京晚报 8月16日3版
 91. 青木特派員「老舍の最後」 中日新聞 8月16日3面
 92. 陳虞孫「我看《四世同堂》」 人民日報(海外版) 8月17日2版
 93. 郑坚·谢国华「记载了中华民族的觉醒 导演林汝为谈电视剧《四世同堂》」 北京晚报 8月18日1版
 94. 晨兴「重整河山待后生」 同上3版
 95. 秋林「他把老爷子演活了」 北京日报 8月20日3版
 96. 「『小卒』寫將軍 摘自《成都晚报》」 人民日報(海外版) 8月21日8版
 97. 石垣綾子(夏姬翔译)「老舍——在美国生活的时期」 新文学史料3期 8月22日 p 157~160
 98. 李翔「老舍先生教育了我们」 北京晚报 8月23日3版
 99. 赫成「请看老舍先生原著」 同上
 100. 远方「买老舍著作有专柜」 同上4版
 101. 郑邦玉「原著是我创作的依据 扮演祁瑞宣的一点体会」 北京日报 8月24日3版
 102. 王行之「反帝反封建的警世之作——读老舍的长篇小说《四世同堂》」 人民日报 8月26日7版
 103. 舒乙「老舍的関坎 1. 出世即遭“冷遇”」 人民日报(海外版) 8月26日7版
 104. 「2. 在刺刀下酣睡」 同上8月27日
 105. 「3. 偷偷考學」 同上8月28日
 106. 「4. 退婚」 同上8月29日
 107. 「5. 自願受窮」 同上9月2日
 108. 「6. 寫小說」 同上9月3日

109. 「7. 當專業作家」 同上 9月4日
110. 「8. 出走」 同上 9月5日
111. 「9. 扛起“文協”大旗」 同上 9月6日
112. 「10. 回国」 同上 9月9日
113. 「11. 走上舞台」 同上 9月10日
114. 「12. 最後的“坎儿”」 同上 9月11日
115. 「老舍最後的兩天 摘自《中國報刊紙》」
北京晚報 8月26日2版
116. 于平「要正視阿Q精神的存在」 北京晚報
8月30日3版
117. 李文玲「少不了他們——談《四世同堂》
中的群眾演員」 北京日報 8月31日5版
118. 「中國老舍研究會通訊 第一期」 中國老
舍研究會 8月
119. 吳祖光「我願為老舍研究服務」 同上
120. 「致會員」 同上 p 1~2
121. 「中國老舍研究會顧問、理事、常務理事及
工作機構名單」 同上 p 2~3
122. 「中國老舍研究會章程（草案）」 同上
p.3~5
123. 「中國老舍研究會會員名單」 同上 p.5
124. 「冰心的祝賀」 同上 p 6
125. 「日本老舍研究會致中國老舍研究會的賀信」
同上 p 6~7
126. 「老舍國際友人協會致中國老舍研究會的賀
信」 同上 p 7
127. 「日本老舍研究會代表委員柴垣芳太郎訪華」
同上 p 7~8
128. 「老舍國際友人協會組織者保樂·巴迪訪華」
同上 p 9~10
129. 「老舍作品在西德」 同上 p 10~12
130. 「研究信息」 同上 p 12~13
131. 「簡訊」 同上 p 13
132. 燕翎「《四世同堂》連環圖」 文匯報
9月3日
133. 王玲玲「為何一曲大鼓成了流行曲？」 北
京晚報 9月4日3版
134. 「胡喬木讚揚電視劇《四世同堂》 稱它給
文藝界“帶來一股清新的風”」 人民日報
（海外版） 9月5日4版
135. 「胡喬木鄧力群等會見《四世同堂》電視劇
組時指出 真正好的文藝作品就會受到廣泛歡
迎」 北京日報 9月5日1版
136. 王志遠「書屋里的副市長（散文）」 北京
晚報 9月6日3版
137. 段寶文「北京人愛老舍」 同上
138. 越名「聞駱玉笙遺憾有感」 北京日報
9月7日1版
139. 吳曉鈴「北平的“白巡長”們——危城追憶
之二」 北京晚報 9月9日3版
140. 趙慧璋「北京曲藝何處尋？」 北京晚報
9月11日3版
141. 馬貴昌「《四世同堂》在國外」 光明日報
9月12日3版
142. 「沐語堂向『文協』捐贈房產 摘自《今晚
報》」 人民日報（海外版） 9月13日8版
143. 趙慧璋「《四世同堂》主題曲的啟示」 北
京日報 9月17日4版
144. 金惠群「小順和妞妞」 北京晚報 9月17
日3版
145. 侯鴻緒「老舍題詩的紙扇 摘自《安徽日報》
」 人民日報（海外版） 9月22日8版
146. 崔琦「北京觀眾盼曲藝」 北京晚報 9月
26日3版
147. 「近二十個國家和地區購買四世同堂播放權
摘自《四川工人報》」 北京晚報 9月30日
2版
148. 李維康「我真的象韻梅嗎？」 戲劇報9期
p.38
149. 周關東「“大赤包”怎麼長得不丑？」 上
海電視 9月 p 11~12
150. 李明光·譚明「小彩舞風采不減當年——
國慶前訪曲藝家駱玉笙」 人民日報（海外版）
10月1日3版
151. 「テレビ・ドラマ『四世同堂』が大ヒット」
北京週報 10月1日 p 30~33
152. 吳曉鈴「北平的『錢詩人們』——危城追憶
之三」 北京晚報 10月4日3版
153. 「青島的作家故居 摘自《中國旅遊報》」
人民日報（海外版） 10月8日8版
154. 韓少華「仁壽者」 人民日報（海外版）
10月16日7版
155. 楊子迪「十四部電視劇獲飛天獎」 人民日
報（海外版） 10月17日1版

156. 黄威 房冠明「优秀电视剧『飞天奖』发奖大会举行 电视连续剧《四世同堂》获得特别奖」 文汇报 10月17日
157. 幽燕士「曲艺磁带哪里卖？」 北京晚报 10月23日3版
158. 关纪新「中国老舍研究会召开《四世同堂》讨论会」 光明日报 10月24日3版

「老舍資料近刊」

(『老舍研究会会報第3号』所収)

補 正

倉橋 幸彦

① 1985年・1 吳組湘「説《離婚》」

著者が老舎と縁浅からぬ吳組湘、題名に“離婚”という文字があるとはいえ、これは魯迅の《離婚》についての評論。本文冒頭に魯迅の名が見えるうえに、文中には老舎の名は一回たりとも現れない。中国現代文学史上、《離婚》といえば、まず第一に想起されるのは魯迅の名ではないだろうか。序ながら、吳組湘のこの一文、最終ページは111、p 118は陳涌「談魯迅研究」の最終ページ。

② 1984年・71 胡潔青「老趕不上趟」

最近の北京の目まぐるしい変化を一方では賞賛しながらも、一方では「老趕不上趟」と、滅びゆくものへの愛着を吐露した胡潔青さんの散文の逸品。文中確かに“老舎故居”開設のことについて触れられてはいるが、この文章やはり「老舎資料」というよりは、“老北京”であり一画家、一散文家の名品として味わいたいものである。序ながら、この文章は『新華文摘』(1984年10月号)に転載され、また『北京文学』誌のコンクール散文部門でも賞を獲得。

③ 1985年・20、21、23、24

この四点、副題に「《四世同堂》拍摄散記」とあるように、連続テレビドラマ《四世同堂》の撮影秘話であり、老舎の原作を論じたものとは全く別個のもの。これらを他の「老舎資料」と同等に数えることには些かの疑問を感じる。

おまけに、この四点を取りながら同じ副題を持つ「小羊圈里的日本人」(『北京晚报』4月9日)を取らないというのも統一に欠ける。

テレビドラマ《四世同堂》が好評を博し、製作者や演者の苦労話を含め、このテレビドラマに関する評論は五百本を越すといわれているが、その大半は老舎の原作にまで言及していないものであり、これらは一括してテレビドラマ《四世同堂》の資料として扱ったほうがいいのではないだろうか。当然のことながら、1985年・14、16、18、19、22についても同様。《駱駝祥子》をはじめ、老舎の作品には他の人の手を通してそれが話劇や映画に改編されたものがあるが、それらはすでに老舎の作品ではないと見なすのが妥当ではなからうか。このことを顕著に示しているのが「我這一輩子」の映画化である。なお、19「東方の一支紀念曲—談電視連續劇《四世同堂》的下演」は、「・・・的上演」の誤り。

④ 1985年・26「進入多視野的老舎—近年來老舎研究述評」

1979年以降の老舎研究を概観した労作。宋榮毅氏がここで紹介されている資料の数37篇、1984・85年分が7篇。このうち、「老舎資料近刊」に収録されているものは、1984年・31、32の2篇のみ。日本における中文資料入手の状況を最大限考慮しても、王行之「老舎的語言芸術觀」(『光明日報』1984年3月15日)は容易に目にすることができるはず。他の4篇もすべて、労を厭わなければ日本でも確認できるもの。1984年、吳小美「市民社会灰色人物的灰色悲劇」(『蘭州大学学报』第1期)王惠云「試論《牛天賜伝》」(『華北師院学报』第1期)舒乙「老舎作品中的北京城」(『讀書』第8期)揚中「論老舎三十年代初期之國情感」(『四川大学学报』第2期)

⑤「老舎資料近刊」には収録の対象が明記されていないが、ここでは日本で実物を確認しえらると思えられる数点(1984年1月を上限、1985年5月を下限)のみ増補しておく。(以下の増補資料のうち、多くは本号の資料近刊(2)でも収めていますが、まだ事務局に入っていない

い雑誌等もありますので、重複分も含めて、倉橋氏の報告のまま掲げます。事務局)

1984年

- 補1 徐麟「論《駱駝祥子》的結尾和其他」
中国現代文学研究叢刊 第1輯(3月)
p 255 ~ 269
- 補2 張中良「淺談老舍《離婚》的喜劇特色」
中国現代文学研究叢刊 第2輯(6月)
p 299 ~ 307、325
- 補3 孟広来「老舍的話劇藝術」 文史哲 第4期(7月7日) p 21 ~ 29
- 補4 克莹「老舍劇作留給我們的启迪」 文艺研究 第4期(7月21日) p 56 ~ 60
- 補5 陶長坤「論老舍小説的幽默」 文学評論叢刊 第21輯(8月) p 392 ~ 416
- 補6 首広燦「老舍与梁実秋」 文史哲 第5期(9月7日) p 72 ~ 74
- 補7 李栄峰「從《多鼠齋雜談》看抗戰後期的老舍」 重慶師院学報 第3期(9月15日)
p 36 ~ 38
- 補8 向東「老舍被冒名、盜版圖書弁析」 中国現代文学研究叢刊 第3輯(9月)
p 311 ~ 313
- 補9 陳朝華「閱与《駱駝祥子》的初版日期」
中国現代文艺資料叢刊 第8輯(9月)
p 142
- 補10 万平近「老舍与林語堂及其論語派」 新文学論叢 第4期(12月) P 129 ~ 142

1985年

- 補1 牛云清「關於老舍中篇小説《無名高地有了名》的評價」 文史哲 第1期(1月7日)
p 59 ~ 65
- 補2 朱開憲「人民藝術家老舍誕生」 北京日報(2月3日)

⑥その他

1984年・54、最終ページは14。1985年・31、『社会科学戦線』第4期の出版月日は、10月25日。

85・11・14 於北大勺園

【余談】

「老舍資料近刊」の最後に、“これを公表することによって今後の収集のメドに出来れば”

とし、“今後引続き努力して完璧を期したい”とあるが、現在の中国の出版情況を考えると、“完璧を期”することは到底不可能。ただ、中国においても詳細な「老舍研究資料目録」が公にされていない以上、この「老舍資料近刊」は研究者に益することと言うまでもない。ただ、資料は“収集”することのみならず、それを利用することに価値があるのではないだろうか。そういう意味からすると、「老舍資料近刊」は、やや利用者の便を考慮する親切さに欠ける、とも言える。それは、中文と日文を、論文と記事(1984年・3、4、5、33、40、46、47、55、1985年・14、16等)、また論文と著作をわざわざ一括して配列したことに現れている。資料目録作成において、資料の構成・配列は、作成者の腕の見せ所であり、また主観を介入することが出来る点でもある。仮に、網羅主義の目録を目指すならば、やはり解題付き目録の出現が望ましい。さらに付け加えるならば、アメリカ・フランス・ソ連を初めとする諸外国の研究にも目を向ける必要があるだろう。

事務局だより

◇7月20日、名古屋大学文学部において、第2回総会ならびに研究発表会が行なわれました。4名の方による研究発表と報告が1本、題目等は本会報第3号の事務局だよりに予告した通りです。

◇7月20日の総会に先だち、同日12時半より、委員会を開催いたしました。総会の運営をはじめ、種々のことが議題となりましたが、ことに問題となりましたのは、会則上の役員に会計監査が設けられておらず、どのような形で実質上の監査を行なうかということでした。討論の結果、明年の総会がちょうど役員改選となるので、本年度は臨時的措置として常任委員の中から2名に監査を委嘱し、会計報告を確認していただくことにいたしました。そして、明年度の役員改選にあわせて、監査の条を会則に加える方向で会則改正を提案することになり、総会での承

認を得ました。

◇11月2日、名大にて常任委員会を開催、会報第4号の編集、事務局収蔵資料のコピーサービス等について話し合いをいたしました。名大中国文学科有志の好意的な申し出によって、1枚40円にてコピーサービスができることとなります。ただし、公費等によるもので、領収書を必要とされる場合は、1枚50円となります。資料名、領収書の要否を明記の上、事務局にお申し出下さい。

◇中国においても老舎研究会が正式に発足し、「中国老舎研究会通訊」第一期（1985年8月、北京刊）が発行され、本会事務局にも届いております。全13頁で、下記のような内容です。

我愿为老舎研究服务（吴祖光）

书讯

致会员（中国老舎研究会）

中国老舎研究会顾问、理事、常务理事及工作机构

中国老舎研究会章程（草案）

中国老舎研究会会员名单

冰心的祝贺（冰心）

日本老舎研究会致中国老舎研究会的贺信

老舎国际友人协会致中国老舎研究会的贺信

日本老舎研究会代表委员柴垣芳太郎访华

老舎国际友人协会组织者保乐·巴迪访华

老舎作品在西德

研究信息

简讯

◇中国老舎研究会の役員は、下記の諸氏です。

顧問（13名）

周扬、叶圣陶、巴金、阳翰笙、冰心（女）、胡絮青（女）、曹禺、臧克家、吴组湘、冯牧、罗荪、侯宝林、于是之

理事（42名、以姓氏笔画为序）

万平近（福建）、马小弥（女、北京）、王栋（江苏）、王行之（北京）、王松声（北京）、王家声（广东）、王惠云（河北）、文天行（四川）、史若平（山东）、史承钧（上海）、再忆桥（女、上海）、吕恢文（北京）、向东（北京）、刘安章（四川）、关纪新（北京）、孙钧政（北京）、克莹（女、北

京）、苏庆昌（河北）、李航（湖北）、李辉（女、北京）、李逸涛（湖北）、吴小美（女、甘肃）、吴怀斌（安徽）、吴祖光（北京）、佟家桓（深圳）、张钟（北京）、陈震文（女、辽宁）、范亦毫（青海）、弥松颐（北京）、孟琮（北京）、孟广来（山东）、孟宪仁（辽宁）、赵园（女、北京）、赵展（北京）、胡书经（北京）、高玉昆（北京）、高起祥（北京）、郝长海（吉林）、蒋瑞（女、北京）、曾广灿（天津）、詹开第（女、北京）、樊骏（北京）

常务理事（27名、以姓氏笔画为序）

万平近、马小弥、文天行、王行之、王松声、再忆桥、吕恢文、关纪新、孙钧政、克莹、李辉、李逸涛、吴小美、吴怀斌、吴祖光、佟家桓、陈震文、范亦毫、孟琮、孟广来、胡书经、高玉昆、高起祥、郝长海、蒋瑞、曾广灿、樊骏

会長：吴祖光

副会長：王松声、孟广来、胡书经、吴小美、王行之

秘書長：孙钧政

副秘書長：克莹、孟琮、吕恢文、高玉昆、李辉、关纪新

◇中国での第三次老舎学術討論会が、86年3月25日から30日まで、北京において開催されることが、ほぼ決まったようで、非公式の打診として、本会あての招請状が届けられる旨、連絡が入りました。これまでの学術討論会には本会会員が何名か参加しておりますので、今回も本会会員を中心として訪中団を組織できればと、考えております。期日が三月下旬ということで、学校関係の会員には学年末のお忙しい時とは存じますが、参加していただけます方は、どうぞ早めに事務局まで御一報下さい。

老舎研究会会報第4号（1985年12月15日）

〒464 名古屋市千種区不老町 名古屋大学文学部中国文学研究室内 老舎研究会事務局

（TEL 052-781-5111 内線2245）